

第3戦は4ポジションアップするものの、無念のリタイア。
第7戦は、諦めずに走り切って22位でチェッカー！



結成2年目を迎えた『HAZAMA ANDO Triple Tree Racing』は、7月17日（金）～7月19日（日）に静岡県・富士スピードウェイにて開催された『第3回瑤子女王杯 | 2026 年全日本スーパーフォーミュラ選手権 第3戦・第6戦・第7戦』に参戦いたしました。

3日間でのべ56000人もの来場者が訪れ、サーキットのいたるところでファンの熱気が十分感じられた本大会ですが、前日開催された第6戦決勝で22位完走を果たした Juju とチームは、不満だったドライ路面でのハンドリングを改善すべく夜遅くまでかけてセッティングを変更し、まずは日曜日の午前中に開催された第3戦決勝に臨みました。

第3戦のスターティンググリッドは、中止となったオートポリス大会での予選グリッドが適用されます。Juju はオートポリスの予選で1分28秒608を記録しており、21番手グリッドからのスタートとなりました。

「昨日より全然良いけど、まだコーナーのミッドで横方向の踏ん張りが足りない」とレコノンサスラップ（スタート前の試走）で無線を入れてきた Juju に対し、エン



ジニアはスタートまでの短い時間で更なるセットアップ変更を施し、午前 10 時 05 分に第 3 戦のスタートが切られました。

気温 29℃、路面温度 34℃という薄曇りのコンディションの中、いつも通りの好ダッシュを見せた Juju の前方で数台のマシンが接触するアクシデントが発生。冷静にイン側にステアリングを切ってアクシデントをうまく避けた Juju は、その混乱に乗じてポジションを上げ、17 番手で 1 周目のコントロールラインを通過しましたが、レースはセーフティカーが導入されました。そしてセーフティカー導入中に Juju のマシンを抜いてしまったドライバーが、ポジションを戻したものの審査委員会で審議の対象となったことで、コース上の破損車両が避けられた後もセーフティカーが走り続けるという、予期せぬ事態となりました。

結局レースは 9 周終了 10 周目から残り 16 周での再スタートとされました。その再スタート直後の第 13 コーナーで、いきなり後続車にイン側から接触された Juju のマシンは右後輪ホイールが破損し、万事休す。悔しいリタイアに終わりました。

Rd	サーキット	周回数	天気	気温	路温	予選	決勝
3	富士	9	曇り	29℃	34℃	21	リタイア

※気温、路面温度は決勝スタート時

ピットに戻ってきた Juju は、すぐに頭を切り替え続く第 7 戦に向けてエンジニアにマシンの状況を伝えます。短い時間をいかに有効に使い、理想のハンドリングに近づけるかが勝負です。わずかなフィーリングの変化もすべてエンジニアに伝え、データをチェックして対応を練ります。1 大会 3 レース制のイベントでは、食事を取る時間すらままならず、リタイアの悔しさに浸っている時間などありません。

午後 3 時 35 分、41 周で競われる第 7 戦スタート直後、フォーメーションラップ中に Juju から無線で「A コーナーにオイルが出ている」と報告が入り、前方の 1 台のマシンがそのままピットに戻りました。その 1 台を除く全車がグリッドに着いた段階で、オイル処理のためにスタートはディレイとなりました。

コースの約 1 周に渡ってオイルが出ていたので、一旦全車グリッドからピットレーンに戻され、オフィシャルによってコースの清掃が行なわれました。

レースは午後 4 時 20 分に、ピットレーンからそのままセーフティカースタートでの再開となり、41 周レースと発表されました。

レースは 6 周目にセーフティカーが戻され再スタートが切られました。前のマシンを追い続けた Juju は 11 周目にいち早くピットイン。タイヤ交換を済ませ、ブレーキダクトを塞ぐガムテープも剥がしてコースに復帰。しかし第 1 コーナーをクリアした段階で悲痛な無線がピットに届きました。「タイヤがはまっていない！」

Triple Tree Racing





左後輪が緩んだ状態でフラフラと走る 10 号車の映像を見て、チームは安全のためマシンをコースサイドに止めてリタイアさせることも考えましたが、Juju が無線で「タイヤを壊してしまうかも知れないけど、なんとかピットに戻ってもいいかな？」とレース継続への執念を見せ、チームもこの一言で気持ちを切り替えました。

チームは Juju の悔しさを晴らすべく、緩んだタイヤを交換し、再び 10 号車をコースに戻したのです。

すでに周回遅れでレースの権利は失っていたこともあり、野田英樹監督は「まだ富士のレースが残されているからデータを取ろう」と無線で Juju をピットに戻し、ガレージで大幅なセット変更を施し、再度コースに戻します。そして Juju はその後、自己ベストラップを更新する意地を見せて走り切り、最終的に 22 位でチェッカーを受けました。

Rd	サーキット	周回数	天気	気温	路温	予選	決勝
7	富士	33	曇り	29℃	36℃	23 位	22 位

※気温、路面温度は決勝スタート時

◆ドライバー Juju のコメント

「昨日の第 6 戦も、今朝の第 3 戦も、本当に悔しいレースが続きました。でもエンジニアやメカニックさんたちが昨日の夜遅くまで頑張ってくれたおかげで、マシンは昨日より今日のほうが進化した手応えはありました。

第 3 戦はスタートがうまくいって、前の方のアクシデントもうまくかわしたのですが、最後は悔しいアクシデントで終わってしまいました。それでもチームはすぐにそれを修復し、短い時間の中でさらに良くなるようセットアップを変更し、第 7 戦に向けて準備してくれました。

しかし残念ながら第 7 戦ではピットイン時のタイヤ交換で左後輪がしっかりと締め付けられておらず、その時点でレースの権利を失ってしまいました。それでも諦めない私たちは、なんとかピットにマシンを戻してタイヤ交換をし、次の富士に向けてのテストと割り切って、全力で走り続けました。途中、セットアップの変更も試みて、これが不調の原因だったのかもしれないという、ヒントもつけられました。

チェッカーを受けたあと、『悔しくない人はチームにひとりもないはずだから、次はみんなで獲りましょう、今日はありがとうございました』と無線でピットに伝えました。このチームの良いところは、誰も諦めてはいないことです。悔しい気持ちは絶対に無駄にはならないし、それによってより強くなるはずです。ミスや失敗を引きずらず、常に前に向かって進みます。ファンの皆さんに良いレースを見せられな

Triple Tree Racing



かった悔しい週末でしたが、負けても、負けても、諦めません。次のレースでこの悔しさを晴らしたいと思います。皆さん、今日も応援ありがとうございました」



●森本晃生チームアドバイザー（中央）と意見交換する野田英樹監督と Juju。

◆監督 野田英樹のコメント

「予想以上に厳しい週末でした。昨日のレースも、今日のレースもとても満足できる結果ではありませんし、チームの全員が悔しさをより自分たちの胸に刻み込んだ週末でした。今日の第3戦に関しては、当てられてしまったことでレースが終わりました。それ以上、コメントすることがありません。第7戦は、ブレーキ温度の問題もあって早めにタイヤ交換する作戦に出たのですが、気持ちが焦ったのかミスが出てしまいました。去年の最初の頃と比べると、10秒かかっていたタイヤ交換が5秒でできるようになって、全体で2番手の早さでタイヤ交換できるチームへと成長したのですが、さらに上を目指したらミスもでる。ミスしたことを責めるのではなく、原因を理解し、対策し、同じミスをしないように全員で共有することが、チームの強さに繋がるはずです。それでも Juju がマシンをピットまで運んでくれたので、次に繋げるテストをすると気持ちを切り替え、全員で最後まで戦い続けました。応援してくださったファンの方々には申し訳ないですが、今日の悔しさをわかちあって



くださった皆さんとともに、一回り強くなって次のレースを戦いたいと思っています。
これからも応援よろしくお願いします」



◆代表 土沼広芳のコメント

「長くレースを戦っていれば、良いときもあれば悪いときもあるということはわかっています。その意味で、この週末はチームにとって試練のひとつだったのかも知れません。しかし、得られたプラス面もかなりあったのは、僕の目には明らかなです。悪い点は改善し、良い点を伸ばしていく。そしてチーム全員でそれを共有する。野田英樹監督やエンジニア、メカニック、そしてドライバーが一丸となって悔しさを共有し、前へ、前へと進んでいくのが挑戦者としての我々の立ち位置です。このチームはとても注目度が高いですし、次は結果を求められているのは間違いありません。でも焦ることなく、チーム力の底上げをしていくことです。少しでも多く走って、データを集めることです。その意味で、今日の第7戦は、このチームの絶対に諦めないというスピリットを感じました。森本晃生チームアドバイザーともよく話し合い、次のレースへ向けての改善点を見出していきたいと思っています」

◆この件に関するお問い合わせ: マネージメントアドバイザー チャーリー・チェン cac@3tree.jp

Triple Tree Racing

